



第63回 上田市短詩型文学祭 入賞作品



今年の夏に作品を募集したところ、短歌、俳句、川柳、詩（ポエム）の4部門合わせて、1,430作品の応募をいただきました。ご応募くださいました皆様、そして選者の先生方、ありがとうございます。
 12月10日（日）には、各賞の入選者を迎え、上田文化会館ホールで表彰式を開催しました。入選された皆様、本当におめでとうございます。応募いただいた全作品を掲載した作品集を作成し、中央公民館ロビーに設置しております。ぜひご覧ください。

上田市長賞

短歌の部

眠りある妻さまたげぬ音量で夏夜聞きをり落語 『芝浜』 常磐城 大屋 恍雄
 〈評〉先に休んだ妻への思いやりが感じられる魅力的な歌。夫婦愛を語る人情落語『芝浜』を結句に据えた点にも工夫が感じられる。

俳句の部

新盆の遺影の笑みに語りかけ 大屋 竹内 栄
 〈評〉昨年、母があるいは連れ合いを亡くし、今年新盆を迎えた作者が笑みを湛えている遺影に向かって語りかけている。故人と共有した懐かしい思い出が次々と浮かんで尽きることがないのだろう。

川柳の部

マスク取れ待たせた紅を薄く引く 諏訪形 有賀利枝子
 〈評〉マスク顔が日常だった数年間、お化粧の仕上げに不可欠だった口紅は無用となって化粧品入れの隅っこに。ようやくマスクを外せる機会が増え口紅再登場、鏡を見ながらまず薄くそつと紅を引いてみる。女性ならではの感性で、的確に表現されています。

上田市教育委員会賞

短歌の部

自給率低き日本の行く末を思ひ草取る峽の棚田に 浦野 中沢 洋子
 〈評〉我が国の食料自給の問題点を衝く上句。少々優等生言辭ながら、下句の草取りの実景描写に説得力がある。

俳句の部

天の川映やして流る千曲川 大屋 矢島 茂雄
 〈評〉水に星が映るのは秋の澄んだ大気ならではですが、この句はそれを映やしてと表現しています。つまり、千曲川に映る星を流れるみずによってさらに美しく輝いて見えると詠んでいます。自然の神秘的な美しい光景が目に見えるようです。

川柳の部

ゆっくりと生きよう明日が楽になる 真田町本原 桂川 秋生
 〈評〉歩きなれた散歩道もゆっくりと歩けば、頬を撫でる風の温かさも匂いも違い、見慣れた街の風景も違って見え、新たな発見に巡り合うこともある。
 刻一刻を競い神経を削る現代、思いつく限り無駄な時間を削ぎ落とし、時間に余裕を持たせ、多くの時間を自分の「意思決定」に従って使う、この「ゆっくりと堪能する時間」が幸せに繋がるといふ、スローライフの極意を会得・実践し、楽しい日々を過ごしている作者の心情が良く表現されています。

上田中央公民館長賞

短歌の部

神棚に裏表凹む砥石供え農に生きたる父に礼をする 真田町本原 山崎 英介
 〈評〉篤農家だった父への尊敬の念を、使い込んだ砥石に象徴させ、敬虔な一首となっている。

俳句の部

風花は黄泉の花びら頬掠む 長瀬 白井由美子
 〈評〉晴天に風に送られてまばらに飛んで来る雪片が風花。その風花がふわりと私の頬を掠めて過る。それは死後魂がゆくという、あの世の花片が雪片となって飛来してきたのだと捉えたのだ。その感性が素敵で、共感を呼ぶ。

川柳の部

二度とない今日の命を噛み締める 東御市 金井真田丸
 〈評〉生涯は誰も一度だけの貴重な身体と時間である。
 その使い方は各々の自由であり、生き方行動を大きく左右する。過去の行動と過程を踏まえ、将来の方向性について考察した時、一度しかない自分なりの命の最高方針は、自身の企画と実行である。その大事な瞬間である事を肝に命じ、前向きに生きようとする決意が詠まれていて共鳴をうける。

応募結果		
一般	81人	156作品
小学生	723人	723作品
中学生	551人	551作品
合計	1,355人	1,430作品